

男女共同参画に関する市民意識調査 報告書

平成 29 年 3 月

春日井市

目次

I 調査の概要

1	調査の概要	1
1-1	調査の目的	1
1-2	調査対象者及び調査方法等	1
1-3	回収結果	1
1-4	調査内容	1
1-5	標本誤差	2
1-6	報告書の見方	3
1-7	調査結果のまとめ	4

II 調査の結果【一般市民】

1	回答者の属性	13
2	男女の平等意識について	16
2-1	各分野における男女の地位	16
2-2	男女平等に関する法律・用語等の認知度	35
3	家庭生活について	37
3-1	「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について	37
3-2	家庭内の仕事の分担	41
4	職業生活について	57
4-1	女性が職業をもつことについて	57
4-2	女性の職業生活における障害	65
4-3	各分野で女性のリーダーを増やすときの障害	67
4-4	自己都合による離職・転職	70
4-5	男性の育児休業・介護休業の利用について	73
4-6	男女がともに働きやすい環境をつくるために必要なこと	77
4-7	「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度	79
4-8	自身のワーク・ライフ・バランスの状況	84
4-9	非就業者の今後の就業意向	85
5	地域活動について	92
5-1	地域活動への参加状況	92
6	子どもの教育について	98
6-1	望ましい子どもの育て方	98
6-2	子どもに期待する進学先	100
7	メディアにおける性・暴力や性別役割分担の表現について	104
7-1	メディアにおける性・暴力や性別役割分担の表現について	104
8	人権の尊重について	108
8-1	男女の人権が尊重されていないと感じるもの	108
8-2	夫婦・恋人間の暴力等について	110
8-3	恋人・配偶者から暴力を受けた経験	115

9	市の男女共同参画の取り組みについて	121
9-1	市の男女共同参画の取り組みの認知度	121
9-2	男女共同参画社会の形成のために市が力を入れていくべきこと	123
10	自由意見	125

Ⅲ 調査の結果【中学生・高校生】

1	回答者の属性	135
2	男女平等について	136
2-1	家庭・学校・社会における男女の平等	136
3	日常生活について	141
3-1	「女らしくしなさい」「男らしくしなさい」と言われることについて	141
3-2	家庭内での手伝いの状況	143
3-3	情報源としているメディア	149
3-4	日常生活における男女の役割分担について	150
4	結婚・将来の生活について	157
4-1	「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について	157
4-2	将来の生活における仕事・健康・家庭・家事の重要度	159
5	教育について	163
5-1	勉強する理由	163
5-2	希望する進学先	165
6	職業について	167
6-1	職業選択の際に重要視すること	167
6-2	女性が職業をもつことについて	176
6-3	リーダーや管理職になることについて	178
7	男女の人権について	183
7-1	交際相手との間の暴力等について	183
8	市の男女共同参画の取り組みについて	190
8-1	男女共同参画社会の実現のために市が力を入れていくべきこと	190
9	自由意見	192

資料

1	アンケート調査票【一般市民】	201
2	アンケート調査票【中学生】	217
3	アンケート調査票【高校生】	225

I 調査の概要

1 調査の概要

1-1 調査の目的

本調査は、春日井市の男女共同参画社会の形成に関する市民の考え等を把握し、平成 29 年度に改定する「新かすがい男女共同参画プラン」の基礎資料とするために実施しました。

1-2 調査対象者及び調査方法等

調査区分	調査対象	抽出方法	調査方法	調査時期
一般市民	春日井市に居住する 20 歳以上の男女 2,000 人	住民基本台帳から 無作為抽出	郵送による 配布・回収	平成 28 年 9 月
中学 2 年生	市内の中学校に在学中の 中学 2 年生男女 521 人	市内の中学校・高等 学校の各 2 年生の クラスを抽出	学校にて 配布・回収	
高校 2 年生	市内の高等学校に在学中の 高校 2 年生男女 612 人			

1-3 回収結果

調査区分	配布数	回収数	有効回収数※
一般市民	2,000	1,051 (52.6%)	1,046 (52.3%)
中学 2 年生	521	521 (100.0%)	521 (100.0%)
高校 2 年生	612	612 (100.0%)	612 (100.0%)

※白紙票を無効とした。

1-4 調査内容

一般市民	中学生・高校生
①男女の平等意識について	①男女平等について
②家庭生活について	②日常生活について
③職業生活について	③結婚・将来の生活について
④地域活動について	④教育について
⑤子どもの教育について	⑤職業について
⑥メディアにおける性・暴力や性別役割分担の 表現について	⑥男女の人権について
⑦人権の尊重について	⑦市の男女共同参画の取り組みについて
⑧市の男女共同参画の取り組みについて	

I 調査の概要

1-5 標本誤差

本調査は、調査対象となる母集団から一部を抽出した標本（サンプル）の比率等から母集団の比率等を推測する、いわゆる「標本調査」です。

「標本調査」では、母集団に対する標本誤差は次の式で求められます。

$$\text{標本誤差} = \pm 1.96 \sqrt{\frac{N-n}{N-1} \times \frac{p(1-p)}{n}}$$

N=母集団	春日井市 20 歳～69 歳人口=197,848 人 (住民基本台帳:平成 28 年 10 月 1 日現在)
n=比率算出の基数(回収数)	春日井市内中学 2 年生=3,020 人(特別支援学級を除く) (平成 28 年 10 月 1 日現在)
p=回答の比率	春日井市内高校 2 年生=2,640 人 (平成 28 年 10 月 1 日現在)

一般市民の場合では、「回収数が 1,046 人であり、ある設問のある選択肢の回答率が 50%であった場合、その回答率の誤差の範囲は最高で±3.0%であり、実際の回答率は 47.0～53.0%の範囲にある。」となります。上式からも、標本誤差は回収数が多いほど小さくなることがわかります。

本調査結果の標本誤差は次のとおりです。

■一般市民

回収数：1,046 人

回収数 n (人)	回答率 P (%)									
	5%又は 95%程度	10%又は 90%程度	15%又は 85%程度	20%又は 80%程度	25%又は 75%程度	30%又は 70%程度	35%又は 65%程度	40%又は 60%程度	45%又は 55%程度	50%程度
2,000	±1.0	±1.3	±1.6	±1.7	±1.9	±2.0	±2.1	±2.1	±2.2	±2.2
1,500	±1.1	±1.5	±1.8	±2.0	±2.2	±2.3	±2.4	±2.5	±2.5	±2.5
1,046	±1.3	±1.8	±2.2	±2.4	±2.6	±2.8	±2.9	±3.0	±3.0	±3.0
1,000	±1.3	±1.9	±2.2	±2.5	±2.7	±2.8	±2.9	±3.0	±3.1	±3.1

■中学生

回収数：521 人

回収数 n (人)	回答率 P (%)									
	5%又は 95%程度	10%又は 90%程度	15%又は 85%程度	20%又は 80%程度	25%又は 75%程度	30%又は 70%程度	35%又は 65%程度	40%又は 60%程度	45%又は 55%程度	50%程度
1,500	±0.8	±1.1	±1.3	±1.4	±1.5	±1.6	±1.7	±1.7	±1.7	±1.8
1,000	±1.1	±1.5	±1.8	±2.0	±2.2	±2.3	±2.4	±2.5	±2.5	±2.5
521	±1.5	±2.1	±2.5	±2.8	±3.0	±3.2	±3.3	±3.4	±3.5	±3.5
500	±1.7	±2.4	±2.8	±3.2	±3.5	±3.7	±3.8	±3.9	±4.0	±4.0

■高校生

回収数：612 人

回収数 n (人)	回答率 P (%)									
	5%又は 95%程度	10%又は 90%程度	15%又は 85%程度	20%又は 80%程度	25%又は 75%程度	30%又は 70%程度	35%又は 65%程度	40%又は 60%程度	45%又は 55%程度	50%程度
1,500	±0.7	±0.9	±1.1	±1.2	±1.3	±1.4	±1.4	±1.5	±1.5	±1.5
1,000	±1.0	±1.4	±1.7	±1.9	±2.0	±2.1	±2.2	±2.3	±2.3	±2.3
612	±1.3	±1.8	±2.2	±2.4	±2.6	±2.8	±2.9	±3.0	±3.0	±3.0
500	±1.7	±2.3	±2.8	±3.1	±3.4	±3.6	±3.7	±3.8	±3.9	±3.9

※この表の計算式の信頼度は 95%です。

1-6 報告書の見方

- 各質問に対する回答者数は、グラフ中においては「n」と表記しています。
- 回答率は「%」で表し、小数点以下第2位を四捨五入しています。このため、内訳の合計が100.0%にならない場合があります。
- 複数回答が可能な質問の場合は、その項目を選んだ人が回答者全体のうち何%なのかという見方をするため、各項目の比率の合計が100.0%にならない場合があります。
- 本文中において、割合(%)の大小は、「高い」「低い」と表現しています。
- 本文中やグラフ・集計表における各質問の選択肢については、意味が変わらない程度に文言を変えて表記している場合があります。
- クロス集計表において、回答がなかった部分は、件数・割合ともに「-」と表記しています。
- クロス集計の分析において、職業別の「農業」、「内職・在宅就業」など、回答数が少ない(概ね30人以下の)カテゴリーについては、誤差が大きいと考えられるため、分析の対象からは除外しています(表・グラフに数値は掲載しますが、本文中ではコメントしていません)。
- 本報告書では、比較分析の対象として、市が過去に実施した同類調査(【前回調査】【前々回調査】)と国が直近で実施した同類調査(【全国調査】)をとりあげています。各調査の概要は以下のとおりです。

【前回調査】

- ・春日井市「男女共同参画に関する市民意識調査」
平成22年9月実施
回答者数： 一般市民：1,041人、中学生：966人、高校生：964人

【前々回調査】

- ・春日井市「男女共同参画に関する市民意識調査」
平成18年9月実施
回答者数： 一般市民：1,183人、中学生：1,491人、高校生：1,448人

【全国調査】

- ・内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」
平成28年8月～9月実施
回答者数： 3,059人
- ・内閣府「女性の活躍推進に関する世論調査」
平成26年8月～9月実施
回答者数： 3,037人

1-7 調査結果のまとめ

【一般市民】

2 男女の平等意識について

2-1 各分野における男女の地位 (P. 16)

男女の地位の平等については「社会通念・慣習・しきたり」「政治の場」「社会全体」「職場」などで『男性優遇』（「男性の方が非常に優遇されている」「どちらかといえば男性の方が優遇されている」を合わせたもの）と感じている割合が高く6割を超えています。一方で、「学校教育の場」では約6割の人が平等と感じています。また、性別でみると、男女の平等感は改善されつつあるものの、すべての項目で、男性より女性の方が『男性優遇』と感じており、依然として男女共同参画社会の実現には至っていないことがうかがえます。

2-2 男女平等に関する法律・用語等の認知度 (P. 35)

男女共同参画に関する用語の認知については「男女雇用機会均等法」が最も高く、次いで「育児・介護休業法」「配偶者暴力防止法」の順となっています。男女間では女性に比べ男性の方が認知度が高くなっています。一方で、「女性活躍推進法」「ポジティブ・アクション」など、女性の活躍に関する用語についての認知度は3割以下となっており、特に30~40歳代で認知度が低くなっています。

3 家庭生活について

3-1 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について (P. 37)

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方は、『概ね賛成』（「賛成」「どちらかという賛成」を合わせたもの）は女性より男性が高く、『概ね反対』（「反対」「どちらかという反対」を合わせたもの）とする否定的な考え方は男性より女性が高くなっています。また、平成18年度調査と比較しても賛成・反対の割合は大きく変わっていません。

3-2 家庭内の仕事の分担 (P. 41)

家庭内の仕事の分担の理想は「食事のしたく」「食事の後片付け、食器洗い」「掃除」「洗濯」「育児・しつけ」「看護・介護」のすべての項目で「男女で協力」が最も高くなっていますが、現実には、いずれの場面でも『主として女性』（「すべて女性」「主に女性」を合わせたもの）の割合が高くなっています。

4 職業生活について

4-1 女性が職業をもつことについて (P. 57)

女性が職業をもつことについてどう思うかの設問では、「子どもができれば職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつほうがよい」が最も高くなっています。全国調査では「子どもができて、ずっと職業をもち続けるほうがよい」という考え方が最も支持されており、傾向が異なっています。

「女性は職業をもたないほうがよい」「結婚するまでは職業をもつほうがよい」「子どもができるまでは、職業をもつほうがよい」と答えた人にその理由をたずねたところ、「子どもは母親が家で面倒を見たほうがよいと思うから」が最も高くなっています。

一方で「子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい」「子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい」と答えた人にその理由をたずねたところ「女性が能力を活用しないのはもったいないと思うから」が最も高くなっています。性別で見ると男性は「女性が能力を活用しないのはもったいないと思うから」、女性は「女性も経済力をもった方がいいと思うから」の割合が高くなっています。

4-2 女性の職業生活における障害 (P. 65)

女性が職業を持ったり職業を続けたりする上で障害となることは「家庭内の問題」が最も高くなっています。性別で見ると男性は「支援制度の問題」、女性は「家庭内の問題」の割合が高くなっています。

4-3 各分野で女性のリーダーを増やすときの障害 (P. 67)

女性のリーダーを増やすときに障害になるものは男女とも「保育・介護・家事などにおける夫などの家族の支援が十分ではないこと」が最も高く、次いで「保育・介護の支援などの公的サービスが十分ではないこと」「長時間労働の改善が十分ではないこと」などとなっています。

また「女性自身がリーダーになることを希望しないこと」「現時点では、必要な知識や経験などを持つ女性が少ないこと」といった女性に原因があるとする見方については、男性の割合の方が高くなっています。

4-4 自己都合による離職・転職 (P. 70)

自己都合による離職・転職の経験については「ある」が約6割、「ない」が約3割となっています。転職・離職した理由については男性では「雇用形態や労働環境への不満」が最も高く、次いで「他にやりたいこと・職業があった」「給与や昇進への不満」が高くなっており、職場に関わる理由が上位にあがっています。一方、女性では「結婚」が最も高く、次いで「出産・育児」が高くなっており、家庭に関わる理由が上位にあがっています。

4-5 男性の育児休業・介護休業の利用について (P. 73)

男性が育児休業や介護休業を利用することについては「男性が取ることには賛成だが、現実的には取りづらいと思う」が最も高くなっています。また、男性が育児休業や介護休業を取得するためにどのようなことが必要かたずねたところ、「取得しやすい職場の雰囲気」「事業主や管理職の理解・奨励」「職場復帰後の労働条件の保障」が男女問わず高い割合となっています。

4-6 男女がともに働きやすい環境をつくるために必要なこと (P. 77)

男女がともに働きやすい環境をつくるために必要なことについては「育児・介護休業制度の推進、長時間労働の改善など、就業環境を整える」が最も高く、次いで「保育園、放課後児童クラブなどを充実させる」との回答になっています。性別で見ると「保育園、放課後児童クラブなどを充実させる」「男性の家事・育児への参加を促進する」は男性より女性が高くなっています。

4-7 「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度 (P. 79)

暮らしの中での優先度は、理想では「仕事」と「家庭生活」をともに優先したい」が最も高くなっていますが、現実では「仕事」を優先している」が最も高くなっています。

I 調査の概要

4-8 自身のワーク・ライフ・バランスの状況 (P. 84)

自身のワーク・ライフ・バランスの状況については『とれていると思う』（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせたもの）と『とれていないとは思わない』（「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を合わせたもの）がともに約5割となっています。

4-9 非就業者の今後の就業意向 (P. 85)

非就業者の今後の就業意向については『職業をもちたい』（「職業をもちたいと思う」「できれば、職業を持ちたいと思う」を合わせたもの）が約5割、「職業をもちたいとは思わない」が約3割となっています。『職業をもちたい』と答えた人の理由は「生活をより豊かにするため」が最も高く、次いで「生計を維持するため」となっています。性別で見ると男性は「生計を維持するため」、女性は「生活をより豊かにするため」の割合が高くなっています。

希望する雇用形態は、性別で見ると男性は「正社員（常勤）」、女性は「パート・アルバイト」の割合が高くなっています。

職業をもつ上で困っていることは「給料、勤務地、勤務時間、雇用形態などの条件が自分の希望と合わない」が最も高くなっています。性別で見ると男性は「自分の資格、能力、適性などに合った仕事の募集・採用が少ない」、女性は「給料、勤務地、勤務時間、雇用形態などの条件が自分の希望と合わない」の割合が高くなっています。

5 地域活動について

5-1 地域活動への参加状況 (P. 92)

地域活動への参加状況については「いずれの活動にも参加しなかった」が最も高くなっています。参加した活動では、「区・町内会・自治会の活動」「趣味・教養文化講座への参加」「子ども会、PTAなどの青少年育成活動」の割合が高くなっています。

いずれの活動にも参加しなかった理由は「仕事が忙しいから」が最も高く、次いで「どんな地域活動があるかわからないから」「地域活動に興味がないから」となっています。年代別で見ると20歳代は「どんな地域活動があるかわからないから」、60歳以上は「自分の健康上の理由から」の割合が高くなっています。

6 子どもの教育について

6-1 望ましい子どもの育て方 (P. 98)

望ましい子どもの育て方については「女の子らしさ、男の子らしさにとらわれず、育てる方がよい」が約6割、「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく、育てる方がよい」が約3割となっています。年代別で見ると、20歳代は「女の子らしさ、男の子らしさにとらわれず、育てる方がよい」が他の年代に比べて高くなっています。

6-2 子どもに期待する進学先 (P. 100)

子どもに期待する進学先については女の子の場合、「大学まで」が最も高くなっています。経年比較をみると平成22年度の調査に比べて「高等学校まで」が減少し「大学まで」「短期大学・高等専門学校まで」が増加している傾向が見られます。

男の子の場合、「大学まで」が最も高くなっています。経年比較をみると「高等学校まで」が減少し「大学まで」が増加している傾向が見られます。

7 メディアにおける性・暴力や性別役割分担の表現について

7-1 メディアにおける性・暴力や性別役割分担の表現について (P. 104)

メディアにおける性・暴力や性別役割分担の表現については『問題があると思う』(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせたもの)が最も高くなっています。年代別でみると20歳代は『問題があると思わない』(「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を合わせたもの)が他の年代に比べて高くなっています。

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人にその理由をたずねたところ「社会全体の性に関する道徳観・倫理観が損なわれている」「そのような表現を望まない人や子どもの目に触れている」がともに約5割と高くなっています。

8 人権の尊重について

8-1 男女の人権が尊重されていないと感じるもの (P. 108)

男女の人権が尊重されていないと感じるものについては「昇給・昇格の格差や仕事内容など、職場における男女の待遇の違い」が最も高くなっています。

8-2 夫婦・恋人間の暴力等について (P. 110)

夫婦・恋人間の暴力等については「携帯電話やスマホを勝手に見たり、勝手に操作をしたりする」「友人との付き合いに干渉したり、付き合いことを認めなかったりする」の項目で「別にかまわない」が1割以上と高くなっています。

8-3 恋人・配偶者から暴力を受けた経験 (P. 115)

恋人・配偶者から暴力を受けた経験については『暴力を受けたことがある』(「何度もあった」「1、2度あった」を合わせたもの)が約1割となっており、前回調査と比べて『暴力を受けたことがある』人が減少し、「まったくない」人が増加しています。

『暴力を受けたことがある』と答えた人にどのような暴力を受けたかたずねたところ「精神的暴力」と答えた人が最も高くなっています。

9 市の男女共同参画の取り組みについて

9-1 市の男女共同参画の取り組みの認知度 (P. 121)

市の男女共同参画の取り組みの認知度については「女性の悩み相談窓口」「市のDV相談窓口」「かすがい市男女共同参画情報紙「はるか」」が約2割となっています。また、「知っているものはない」が5割弱となっています。

9-2 男女共同参画社会形成のために市が力を入れていくべきこと (P. 123)

男女共同参画社会を形成していくため今後市が力を入れていくべきことは「子育て支援の推進と保育サービスの充実を行う」が最も高く、次いで「仕事と家庭の両立のための職場における支援を促進する」が高くなっており、仕事と家庭生活の両立を支援する施策が求められています。

I 調査の概要

【中学生・高校生】

2 男女平等について

2-1 家庭・学校・社会における男女の平等 (P. 136)

家庭生活において男女が「平等になっている」と感じている割合は、中学生・高校生ともに約6割で、学校生活においては中学生が約5割、高校生が約6割となっています。一方、社会全体において平等と感じているのは中学生・高校生ともに約2割で、「男性の方が優遇されている」（2割強）の方が高くなっていますが、一般市民の『男性優遇』（7割以上）と比較すると低くなっています。

3 日常生活について

3-1 「女らしくしなさい」「男らしくしなさい」と言われることについて (P. 141)

「女らしくしなさい」「男らしくしなさい」と言われたことがあるのは、中学生・高校生ともに女子が6割以上、男子が3割以上となっています。誰に言われたかは「母」が最も高く、中学生で約8割、高校生で約7割となっています。

3-2 家庭内での手伝いの状況 (P. 143)

家庭内で手伝いをしている内容は中学生・高校生ともに「食事の後片づけ」が最も高く、中学生は約5割、高校生は約4割となっています。一方、手伝いをしていないのは中学生・高校生ともに「洗濯」が最も高く、ともに約4割となっています。「掃除」「洗濯」「食事のしたく」「食事の後片づけ」「風呂の掃除」のいずれの役割についても、中学生より高校生の方が手伝いをしている割合が低くなっています。

3-3 情報源としているメディア (P. 149)

情報を多く得ているメディアは、中学生は「テレビ」「インターネット」が8割以上、高校生は「インターネット」が9割で「テレビ」が7割以上となっています。性別でみると、中学生の女子は「雑誌」が3割弱で、1割未満の男子より高くなっています。

3-4 日常生活における男女の役割分担について (P. 150)

日常生活における男女の役割分担について、「荷物運びなどの力仕事は男子がするものだ」を『概ねそう思う』（「そう思う」「わりとそう思う」を合わせたもの）のは中学生が7割弱、高校生が8割強となっています。また、「運動部のマネージャーなど細かな気配りをする仕事は女子がよい」を『概ねそう思う』のは中学生・高校生ともに6割以上となっています。一方、「デートで飲食をするときに男子は女子におごるのが普通だ」を『概ねそう思わない』（「そう思わない」「あまりそう思わない」を合わせたもの）のは中学生が6割強、高校生が約7割となっています。

性別でみると、「力仕事は男子がするものだ」は女子より男子が『概ねそう思う』が高く、「細かな気配りをする仕事は女子がよい」は男子より女子が『概ねそう思う』が高くなっています。また、「デートで飲食をするときに男子は女子におごるのが普通だ」は『概ねそう思わない』が中学生・高校生ともに女子で約8割（中学生男子は約5割、高校生男子は約6割）と高くなっています。

4 結婚・将来の生活について

4-1 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について (P.157)

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方については、中学生は『概ね賛成』（約4割）が『概ね反対』（約3割）より高く、高校生は『概ね反対』（約4割）が『概ね賛成』（約3割）より高くなっています。性別で見ると、中学生・高校生ともに、『概ね賛成』は女子より男子が高くなっています。

4-2 将来の生活における仕事・健康・家庭・家事の重要度 (P.159)

将来の生活において「とても大切」と思うことは、中学生・高校生ともに、「仕事をもつ」と「健康を保つ」で約9割、「家事ができる」で6割強、「家庭をもつ」で約6割となっています。『概ね大切』（「とても大切」「やや大切」を合わせたもの）はどの項目でも、中学生は約9割以上、高校生は8割以上を占めています。

5 教育について

5-1 勉強する理由 (P.163)

勉強する理由は、中学生・高校生ともに「将来、希望の仕事につきたいから」が最も高くなっています。中学生の2位は「自分の可能性を広げたいから」、高校生の2位は「将来、希望の大学に入りたいから」となっています。性別で見ると、中学生の女子は「将来、希望の仕事につきたいから」、高校生の女子は「親や学校の先生が勉強するように言うから」がそれぞれ男子より高くなっています。

5-2 希望する進学先 (P.165)

希望する進学先は、中学生・高校生ともに「大学まで」が最も高くなっています。性別で見ると、「大学まで」は中学生は男女で差がみられませんが、高校生は男子が女子より若干高くなっています。

6 職業について

6-1 職業選択の際に重要視すること (P.167)

職業選択の際に「とても大切」と考えることは、中学生・高校生ともに「安定して長く続けられる」が高く、次いで「自分の好きなことがいかにできる」が高くなっています。『概ね大切』（「とても大切」「やや大切」を合わせたもの）は「収入が多い」「自分の好きなことがいかにできる」「多くの人の役に立つ」「安定して長く続けられる」で9割以上を占めています。一方、『概ね大切でない』（「大切でない」「あまり大切でない」を合わせたもの）は「独立して自分だけでできる」で6割以上と高くなっています。

6-2 女性が職業をもつことについて (P.176)

女性が職業をもつことについてどう思うかの設問では、中学生・高校生ともに「子どもができたら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつほうがよい」とする割合が最も高くなっています。また、「わからない」が約2割となっており、一般市民と比較すると「子どもができて、ずっと職業を続けるほうがよい」の割合が低くなっています。

I 調査の概要

6-3 リーダーや管理職になることについて (P. 178)

将来仕事においてリーダーや管理職になることについては、中学生は『概ねなりたい』（「なりたい」「できればなりたい」を合わせたもの）が高く、高校生は『概ねなりたくない』（「なりたくない」「できればなりたくない」を合わせたもの）が高くなっています。性別で見ると、『概ねなりたい』は女子より男子が高くなっています。

リーダーや管理職になりたい理由としては、中学生・高校生ともに「仕事のやりがいがありそうだから」「高い給料をもらえそうだから」「自分の能力を十分に発揮したいから」が高くなっています。一方、リーダーや管理職になりたくない理由としては、中学生・高校生ともに「責任が重くなりそうだから」「自分の能力が十分ではないと思うから」「人間関係で苦労したくないから」が高くなっています。

7 男女の人権について

7-1 交際相手との間の暴力等について (P. 183)

交際相手との間の暴力等については、中学生・高校生ともに「つきまとったり、信じられない回数や内容のメール・LINE などを送る」で「するべきでない」が約8割と高くなっています。また、高校生は「たたく、けるなどの暴力をふるう」で「するべきでない」が9割以上と高くなっています。一方、「ケータイやスマホを勝手に見たり、勝手に操作をしたりする」で「別にかまわない」が中学生・高校生ともに2割以上となっています。前回調査と比べると、中学生・高校生ともに「ケータイやスマホを勝手に見たり、勝手に操作をしたりする」で「すべきでない」が減少しています。

暴力等が生じた場合に相談したい相手は、中学生・高校生ともに「友人」が最も高く、次いで「親」が高くなっています。中学生は「親」が高校生より高く、高校生は「友人」が中学生より高くなっています。

8 市の男女共同参画の取り組みについて

8-1 男女共同参画社会の実現のために市が力を入れていくべきこと (P. 190)

男女共同参画社会の実現のために市が力を入れていくべきことは、中学生・高校生ともに「男女を差別するような古い習慣をなくす」が最も高くなっています。中学生は次いで「子どものときから、男女平等について家庭でも学校でも学習する」が高く、高校生は次いで「企業の理解により、父親が子育てや介護等のため帰宅時間を早め会社を休みやすくする」が高くなっています。性別で見ると、中学生・高校生ともに、「子どものときから、男女平等について家庭でも学校でも学習する」が女子より男子が高く、「家事、育児、介護などをみんなで助け合い、女性が仕事を続けられるようにする」は男子より女子が高くなっています。

調査結果からわかる春日井市の現状

【一般市民】

○市民の男女平等に対する考え方として、家庭生活や職場での『男性優遇』の意識が高く、男女が「平等である」との意識は全国と比較して低くなっています。「男女共同参画社会」や「女性活躍推進法」といった用語の認知度も全国より10ポイント以上低くなっています。

○女性が職業をもつことに対する意識をみても、全国調査では「子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい」の割合が最も高くなっているのに対し、春日井市では「子どもができれば職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい」の割合が最も高くなっています。これは「子どもが小さいうちは女性は家庭にいるべきである」と考えている市民の割合が全国平均よりも高いことを示しています。

○ワーク・ライフ・バランスに対する理想と現実をみると、全国調査では「家庭生活」を優先している人が「仕事」を優先している人より多いのに対し、春日井市では「仕事」を優先している人が「家庭生活」を優先している人より多くなっています。男性の育児休暇取得についても7割の人が「現実には取りづらい」と答えており、家庭生活における男女の役割分担の偏りが解消されにくい状況を示しています。

以上のことから、市民の男女共同参画に関する意識は全国平均よりやや下回っており、仕事と家庭生活の両立を理想としながらも仕事を優先しがちである、という現状が伺えます。

○春日井市の男女共同参画社会形成に向けた取り組みについて、市民が最も求めているのは、「子育て支援の推進と保育サービスの充実」と「仕事と家庭の両立のための職場における支援の促進」となっています。特に後者は女性での割合が高くなっています。

【中学生・高校生】

○中学生・高校生の男女平等の考え方として、平等意識が一般市民より高く、家庭生活では約6割が平等と感じており、学校生活では平等が約5割、女性優遇が約2割となっています。社会全体では3割以上がわからないと回答し、男性優遇が2割以上となっていますが、一般市民の7割以上と比較すると、中学生・高校生は男女が平等と感じています。

○「女らしくしなさい」「男らしくしなさい」は、女子は6割以上、男子は3割以上が言われています。

○日常生活における男女の役割分担において、「力仕事は男子がするもの」は概ねそう思うは、中学生が7割弱、高校生で8割強となっています。また、「気配りをする仕事は女子がよい」については概ねそう思うが中学生・高校生とも6割以上となっており、役割によって男女差があると感じています。

また、「力仕事は男子がするもの」については、女子より男子が概ねそう思うが高く、「気配

I 調査の概要

りをする仕事は女子がよい」は男子より女子が概ねそう思うが高いと感じています。

「デートで飲食をするときに男子は女子におごるのが普通」は概ねそう思わないは中学生約6割、高校生約7割となっていますが、女子では、概ねそう思わないが中学生・高校生ともに約8割となっていて、男女で差があることがわかります。

- 中学生・高校生は男女共同参画の取り組みとして、「男女を差別するような古い習慣をなくす」「子どものときから、男女平等について家庭でも学校でも学習する」「企業の理解により、父親が子育てや介護等のため帰宅時間を早め会社を休みやすくする」ことに力を入れていくべきだと考えています。

